



TITLE:

蒙古民族の牧畜について - 特に元朝の成立期ころをめぐりて -

AUTHOR(S):

伊藤, 幸一

---

CITATION:

伊藤, 幸一. 蒙古民族の牧畜について - 特に元朝の成立期ころをめぐりて -. 経済論叢 1962, 90(1): 61-71

ISSUE DATE:

1962-07

URL:

<https://doi.org/10.14989/132890>

RIGHT:

# 經濟論叢

第九十卷 第一號

---

アジア貿易の諸問題……………	松 井 清	1
ブルック・ファーム……………	穂 積 文 雄	12
管理価格と政府部門に関する 問題史的考察(二)……………	池 上 惇	34
蒙古民族の牧畜について……………	伊 藤 幸 一	61

---

昭和三十七年七月

京都大學經濟學會

# 蒙古民族の牧畜について

——特に元朝の成立期ころをめぐる——

伊 藤 幸 一

## 一

蒙古民族といえは、牧畜民族を指しているように考えられているようである。すくなくとも、元朝の成立期ころの蒙古民族については、その傾向が強いように思える。これは、当時、牧畜業を行っていた蒙古民族が史上に名高い事業を成し遂げたからであろう。だが、実際には、当時の蒙古民族の中には牧畜を生業としていたものほかに、狩猟を生業としていたものもいた。しかし、この狩猟を生業としていたもの、つまり、狩猟民は、牧畜を生業としていたもの、つまり、牧畜民に較べて、はるかに発展性の乏しいものであった。すなわち、狩猟民が、一定の森林内にとじこもり、僅かな生産によって細々と生を保っていたのに較べて、牧畜民は、一定の草原内にとじこもっていたのではなく、再三他の民族の地へ物資を求めにでかけたり、

他の民族を襲撃したり、常に外部との交渉をもっていた。従って、牧畜民は、外来の物質文明を受け入れることができた。これに、元朝の成立期ころにおける牧畜民は、大いに外来の物質文明を摂取したといえよう。だから、元朝の成立期ころにおける狩猟民の消極性と、牧畜民の積極性は、顕著に對比できたといえよう。ウラデミルツォフは、当時、狩猟民のなかには狩猟生活をやめて牧畜を試みようとするものも現れたことを記している。これらの狩猟民は、主として、牧畜民の近くで細々と狩猟生活を送っていたものたちであったが、これらの彼等が全く異った生業に変わって行ったということは、当時、狩猟による生産よりも牧畜による生産の方が優っていたこと、また狩猟民が牧畜民の軍門に降ったことなどによったからであろう。だが、かくの如く狩猟民であったものが狩猟を止めて牧畜を試みようとしたことは、当時、狩猟民が減少し、牧畜民が増加したこと

であり、牧畜民の発展を示すものといえよう。また、当時の蒙古民族における牧畜民は、ますます支配的な地位を得たことが推測できよう。しかし、当時の牧畜民は、ただに蒙古高原において狩猟民を支配しただけでなく、ユーラシア大陸を縦横無尽に活躍し、諸民族を脅威の端におとし入れ、遂には史上に名高い大事業を成し遂げた偉大なる民であった。従って、元朝の成立期の蒙古民族といえば、当時の牧畜民のことを指しているように考えられるのも当然のことであろう。

また、このように、元朝の成立期ごろにおける蒙古民族即当時の牧畜民だと考えられるほどであったのは、当時の蒙古民族にとつて、牧畜が最適の生業であったからであろう。当時の蒙古民族の住んでいた地域は、土地の乾燥甚だしく、寒さも非常にきびしい<sup>1)</sup>従って、如何なる生業といえども生産力の大なることを望むことはむづかしい。だからといって、生業を持たないわけにはいかない。そこで、まばらな森林や草原を利用して狩猟を営むものや牧畜を営むものが現れる。また、ときには農耕を試みようとするものが現れる<sup>2)</sup>。それは、これら三者に生業への望みがあったからであろう。なお、これら三者以外に漁撈に努めるものも現れるが、それは、生業への望みをもったものではなかった<sup>3)</sup>。大体蒙古高原において、生業になる可能性のあったものは、この三者に限られていたものと考えてよからう。ところが、その狩猟による生産力は非常に低い。また、生産力が

高いはずの農業も、蒙古高原においては、あまりにも自然的条件がよくない。従って、狩猟だけで生活することはむづかしく、また、農業を生業とすることは無理であった。しかるに、牧畜は、自然的条件に適応し、狩猟や農業の場合よりも生産力は大であった。ことに元朝の成立期ごろにおいては、牧畜における生産力は非常に発達した。これは、牧畜が適当な生業であったからであろう。だから、蒙古高原において最も適当な生業は、牧畜であったことがわかる。また、元朝の成立期ごろにおいて牧畜の生産が増大したことは、当時、牧畜が重要な生業であったことを推測せしむるに足るものといえよう。

ゆえに、元朝の成立期ごろの蒙古民族を知るためには、当時、彼等の支配的な生業となり、彼等にとつて重要な生業であった牧畜業を知らなくてはならないであろう。たとえば、当時みられた歐洲への大遠征を知る場合においても、彼等の生業から切り離して考察できるものではない。従って、まづ、彼等の牧畜業を考察する必要がある。だが、中には当時の彼等を知る上に彼等の牧畜業を知ることが如何に重要なことであるかをのべようとして、たとえば、当時、彼等が行った大遠征を、『畢竟、彼等が牧畜民であったからである。』とまでいっているものもあるが、それは、誇張しすぎたものといえよう。

このように誇張しすぎるといふことは、畢竟、当時の彼等の牧畜業や当時の彼等の社会状態を真に考察したものではないと

いうことになるであらう。そこで、このような弊害に陥らないようにして、ここに、しばらく、当時の彼等の牧畜業の特殊性を究明し、それが、当時の蒙古社会発展に、如何なる關係があったかという点についてのべることにする。

(1) ウラヂミルツォフ「蒙古社会制度史」外務省調査部訳、七五頁。

(2) 長春真人西遊記、卷上、二に、始見回訖決渠灌漑とある。従つて、ウイグル人ではあるが、栽培も行われたことがわかる。

(3) 大体、漁撈が行われたのは狩獵民が生産物の不足を補うためのものであった。(ウラヂミルツォフ、前掲書、七三頁。)

(4) ウラヂミルツォフ、前掲書、九四頁。

(5) 当時の遠征の原因を牧畜に求めようとしたのは、大体、次の如き理山からであらう。すなわち、その一つには、彼等は牧畜を主な生業としているが、生産力が低いから他の民族から物資の補給を受けなければならぬ。そこで、常に物資補給のためにでかける必要がある。ところが、外部へでかければ他民族に接触する機会も多く、遠距離移動もなれてしまう。だから、当時の遠征もこと新らしいものではないという考え方である。つまり、物資の補給と遠征を結びつけたものであり、彼等の生業が生産の乏しいものであることに原因を求める場合である。また、他の一つには、彼等の家畜の飼料が蒙古高原だけでは充分ない。従つて、

外部まで家畜の飼料を求めに行くことも起る。また、それが、ときには非常に遠くまで求めに行かなければならない場合も起り得ると考えるわけである。つまり、遠征と家畜の飼料を得るための移動とを結びつけたものであり、彼等の生業を続ける上についての弱点に原因を求める場合である。なお、これらの所謂彼等の生業の弱点を原因とする場合のほかに、彼等の生業が農耕よりも進んでいるという牧畜業の優越性をもとに民族の優秀性をのべ、遠征能力のある点を指摘する場合がある。つまり、彼等の生業の優越性を原因とする場合である。(米内山庸夫「蒙古草原」序の二頁。及び Arnold Taynbee, A Study of History, Vol. III, pp. 13-16 など) ちなみに、これらのほかに、彼等の生業が乗馬にすぐれた所謂機動部隊を結成させ、武力にすぐれ得るものをもっていたことをもとに、遠征の原因とする場合もある。

## 二

蒙古民族の牧畜は、農耕民族の牧畜が副業であり従たる生業であるのと違つて、すべて専業であり主たる生業である。従つて、ドーンソンも伝えている如く、彼等は、彼等の家畜によつて必要とするほとんどのものを自給するという形態をとつていたのである<sup>1)</sup>。彼等の必要とするほとんどのものを自給するというのであるから、彼等の必要物が如何に『單純な遊牧經濟に必要

なもの』だけだとしても、それらのものは少くないであろう。また、それらを得るための家畜も、非常に多かったものと思われる。そして、それらの家畜は、彼等にとって非常に大切なものであったに違いない。

この彼等にとって必要欠くべからざる家畜は、羊・馬・牛・山羊・駱駝の五畜であるが、それらは、それぞれ一種づつである。従って、彼等の家畜は、全部で僅か五種類にすぎない。

まづ、これらの家畜の中で最も貴重なものと考えた羊についてみるならば、一般的に望まれる良毛という点に欠けて褐色を帯び、尾は大にして形は美しくないが、極めて強健で寒さやとばしい飼料によくたえ、しかも、尻部に脂肪分を多くもっている。従って、蒙古羊は、寒さのきびしい蒙古における蒙古人の重要な食糧となっている。大体、食用にされる蒙古羊は七才が適当だとされているが、牡羊は三才にもなれば完全に成育したものと考えなれている。従って、七―八才になるまで飼育しなければ食用にしないということもなかったであろう。また、蒙古羊の寿命は通常一〇才乃至一二才といわれるが、彼等の飼育の方法たるや、冬季の悪天候といえども何等の小屋も羊舎もつくらず、また、飼料欠乏にそなえて牧草を貯えようともしないような粗雑なやり方であるために、実際には、もっと早く死ぬものと考えて然るべきであろう。なお、蒙古羊からは、ほとんど乳は得られないといわれるが、毛皮や毛は彼等の重要

な衣料となり、糞さえも彼等にとって必要欠くべからざる燃料になるなど、彼等にとって、蒙古羊は非常に重要なものであったことがわからう。

羊について重要な家畜として、馬をあげなくてはならないが、羊の場合と同様に形は美しくない。すなわち、頭は粗大にして頸短く且つ太く、一見粗野で鈍重の感を免れない。しかし、極めて強壯で、きびしい寒さや粗雑な飼育にもたえられるという点においては、他種のまねのできる場所ではない。たとえば、サラブレッドや日本馬などにおいては、馬小屋を必要とし、常に馬糧を用意しておかなければならない。ところが、移動して飼料を得なければならぬ蒙古高原においては、それはできない。従って、蒙古においては飼育に絶えられない馬だということにならう。しかるに、蒙古馬は、氷点下五〇度の酷寒にもさらされる蒙古高原において、馬小屋も飼料桶もなくともひとりで平気で雪をかきわけて牧草を求めており、草が見出されなければ雪を食ってでも蒙古の冬を越すという強壯さである。そうであればこそ、真冬でも蒙古人を乗せて広漠たる蒙古高原を移動する。所謂蒙古民族の足たり得るわけである。また、この点が当時の彼等が機動部隊をいつでも容易に形成することができた由縁であり、他民族がまねすることのできなかったところであらう。なお、蒙古馬は、彼等の足たり得ただけでなく、その肉は食用となり、その皮は衣料となり、その乳は馬乳酒となり、

いずれも彼等に欠くべからざるものとなっていた。従って、彼等にとっては羊と共になくてはならないものであり、他民族における家畜とは趣を異にするものがあつたといえよう。

つぎに、牛についてみれば、これまた羊馬と同様に、耐寒・耐旱・強脚の特性を有しているが、蒙古牛の鈍重で強壯なことは、蒙古馬以上である。体軀はみるからに肉に富み、乳も馬同様に得ることができる。従って、蒙古牛は、牽車用並びに食用に供せられる有用な家畜の一つであつた。

また、山羊についてみれば、これまた他の彼等の家畜と同様に、耐寒・耐旱の特性を有するが、それ以外に、山羊特有の飄軽なところがあつて、羊を誘導するに都合がよい。また、他の動物からの襲撃をいちはやく感知し得る特性があるので羊などの他の家畜の保護の役割を果す家畜として有用であらう。なお、それ以外に、毛皮は衣料となるなど、彼等に必要な家畜であつたに違いない。

さらに、駱駝についてみれば、當時に至ってはじめて飼われるようになった家畜ではあるが、やはり、耐寒・耐旱の性質を有し、広漠たる蒙古高原においては彼等の荷物を運ぶに好都合な家畜である。しかし、蒙古の駱駝は、寒さには極めて強いが暑さには弱い憂がある。従って、夏期においては余り使役できない。だから、夏期になればその毛を剪つて草原に放たなければならぬ。だが、剪つた毛は繩などになる。従って、ただに

役畜たるのみならず、他の面にも有用な家畜であつたことがわかる。

- (1) ドーソン「蒙古史」田中幸一郎訳補、岩波文庫版、上巻、六〇頁。
- (2) ウラヂミルツォフ「蒙古社会制度史」前掲書、九五頁。拙稿、経済論叢、第八一卷第五号、四四頁—四六頁。
- (3) 米内山庸夫「蒙古の理想」一〇一頁。
- (4) カラミシェフ「蒙古と西支那」緒方一夫訳、一六四頁。
- (5) 当時、馬乳酒は儀礼的に重要なものとして誰もが好んだ。なお、儀礼的な必要物としてのみつぐられたのではない。嗜好物でもあつた。(拙稿、経済論叢、第七五巻第一号参照)
- (6) ウラヂミルツォフ「蒙古社会制度史」前掲書、七八頁。

### 三

では、当時の彼等は、これらの家畜を、それぞれどのくらいづつ飼っていたであらうか。

それは、さきにのべた如く、彼等が家畜を飼っているのは、主たる生業とし、これで自給をはからうとせんがためである。従って、一種類だけの家畜を飼っていたのでは充分でない。さきにのべた五畜を適当に組合せる必要がある。

まづ、それが、どのような組合せであつたかを知らなければならぬが、当時の資料は、蒙韃備録に『有一馬者必有六七

羊』とあるにすぎない。従って、充分ではない。だが、いま仮に、近年の外蒙古牧業区における資料を参考にするならば、羊と山羊で七三・八パーセント、馬が一・九パーセント、牛が一・八パーセント、駱駝が二・五パーセントとなっている点から、大体のことは推測できる。しかし、時代的なずれや、地域的な差異を考慮する必要があり、また、貧者と富者とを比較して、必ずしも常に同比率の家畜をもっていたのではなかったことを忘れてはならない。たとえば、駱駝の如きは、当時はじめて彼等の家畜として飼われるようになったものであるから、羊馬同様に誰でも飼っていた家畜とするのは適當でない。駱駝が飼われたのは、大体砂漠に近い地域であったものと思われるが、当時においては、まだ彼等になくはならない家畜にまではなっていなかったように思える。だから駱駝以外の四畜においては、近年のこの示された比率で組合されていたものと推測することに余り問題はなからうが、駱駝は必ずしもこの比率ではなかったこと、すなわち、これ以下であったことに注意する必要がある。また、貧者と富者とを比較するに、貧者の場合は、富者の場合よりもこれらの所有家畜の比率にむらがあったように思える。<sup>2)</sup>

つぎに、どの位いの頭数を飼っていたかを知りたいが、これも、当時の資料では得ることはできない。従って、やはり同様に近年の資料を参考にするなどの方法によるより仕方がない。

仮に、さきの資料を参考にするならば、羊と山羊で四一二万頭余り、馬が六六万頭余り、牛が六五万頭余り、駱駝が一二万頭余りとなっている。だが、この数字は、当時より七〇〇年余り後のもので、家畜の種類組合せの比率の場合より、当時の実数には近くない数字だとみるのが妥当であろう。少くとも常識的には、これらの頭数よりも少い頭数であったとみるべきではなからうか。なぜならば、まず、牧畜を行うについての自然的な条件は七〇〇年前も近年もそれほど変っているとは思えないが、家畜の飼育におけるいろいろな点においては、七〇〇年前の方が劣るとも進んではいなかったに違いない。従って、一人当りの家畜飼育数は、七〇〇年前の方が少なかったものと考えて差支えなからう。また、彼等の人口は、七〇〇年前の方が少なかつたものと考えるべきであらうから、七〇〇年前、すなわち、当時の方が家畜総数は少なかつたものと考えるべきではなからうか。

では、これらの家畜の単位面積当りの頭数、つまり、家畜の密度の点ではどうか。これについてある専門家は、「蒙古では、羊一頭飼育するのに、大体三・一一ヘクタールの牧野を必要とする。従って、仮に羊三〇〇頭、馬一〇〇頭、牛五〇頭をもつ家畜群には、大体一四・一九ヘクタールの牧野が必要である。」<sup>3)</sup>といっている。この数字は、温暖豊沃の地における場合の家畜の単位面積当りの頭数と比較すると、約一割にしか



当らない。これは、蒙古高原では家畜が非常に少ないことを示しているが、また、蒙古高原では家畜を狭域で多く飼うことはできないことも示している。さらにまた、これらのことは、近年だけに当てはまることでなく、当時においても当てはまることであろう。

ところが、このように、蒙古高原においては家畜の密度が非常に少ないこと。換言すれば、蒙古高原においては家畜を狭域で多く飼わなければ彼等の生活必需品を自給することができないのであるから、狭域では牧畜業を営むことはできなかったわけである。そこで、彼等は、広大な放牧地域をもたなければならぬ。だが、そうすれば管理が大変なことになる。少くとも定住していたのでは不可能に近い。そこで、遊牧形態をみることとなる。

しかし、遊牧は放浪ではない。つまり、あてもなく家畜に随つてあるきまわることはできない。凡そ遊牧民たるものは、農耕民族のような耕地への執着心はないが、牧草地への執着心は必ずある。当時の彼等もその例外ではなく、祖先から伝わった牧草地をよく心得ていて、こんどはそれらの中のどこの牧草地へ移動すべきかを知っていた。従って、彼等の移動は、決して気まぐれに風の中の羽のようなものではなく、おのずから一定の次第があった。それは、大体南部と北部にそれぞれ適当な牧草地をもっていたから、その一応きまった南北のそれぞれの地

域間を季節的に移動するのが普通であったように思える。<sup>6)</sup>

- (1) カラミシエフ「蒙古と西支那」緒方一夫訳、三二四頁。
- (2) 『蒙古の秘史』（小林高四郎訳註、一一七頁）に、僅か五頭の山羊だけしかもっていないものことが記されているが、このような貧者の場合は山羊だけが所有家畜の全バーセントということになる。

- (3) カラミシエフ、前掲書、二〇五頁—二〇六頁。

- (4) 滿鉄「蒙疆政権管内羊毛資源調査報告」監調資料、第五篇。

- (5) ウラヂミルツォフ「蒙古社会制度史」前掲書、一二九頁—一三〇頁。

- (6) 黒龍事略に韃人分管草地云々とある。これは、当時の彼等が決められた一定の地域内で牧畜していたことを示している。また、ウラヂミルツォフも、元朝秘史を引用して「遊牧割当地」の名をもつて示している。（ウラヂミルツォフ「蒙古社会制度史」前掲書、九五頁）だが、ルブルクだけは、彼等に定牧地がないことを記している。The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; [Translated from the Latin: by William Woodville Roehil] p. 53) しかし、それは、彼等が餘りにも広大な地域を度々移動しているので、つい定牧地がないようにみえたのであろう。

## 四

では、それらの一応決められた牧草地の所屬關係はどうなっていたか。また遊牧はどういうふうに行われたものであろうか。

まづ、牧草地の所屬關係についてみれば、当時のこれらの牧草地は、氏族共同のものとなっている。氏族共同のものといつても、それは一氏族に属する地域という意味で、蒙古語における *nuug* に当る。従つて、一定の社会結合体の常に遊牧している地域といった方が適當かも知れない。

当時、蒙古部では、戦争や襲撃のたえることがなかった。従つて、共同の遊牧地域といつても、外部からの脅威に常にさらされていた。だから、単独に放牧することは危険であった。従つて、ほとんど皆共同で放牧していた。

共同で放牧するといつても、その規模はいろいろあった。中には数百のユルトが数えられる大規模な放牧もみられたが、中には僅か数個のユルトしかみられない小規模なものもあった。

その大規模なものには、蒙古語で *Kurien* とか或いは *Gurien* とよばれる輪の形をしてその中に長老が入り、敵や異分子を入れないように考案されたものもあった。ところが、この場合、その個々のユルトには幌馬車を並べ、幾人かの家族を伴っている。だから、大規模な共同放牧が行われる場合には、その人数は多く、その家畜はおびただしい数にのほった。ところ

が、これらの家畜には飼料が必要である。従つて、これらの家畜に必要な牧草地は、非常に大きなものでなければならぬ。しかし、蒙古高原は広大な牧草地に恵まれていない。だから、常に大規模な共同放牧を望むわけにはいかない。

凡そ共同放牧の規模の大小は、牧草地の大きさや、家畜群の大きさや、また、襲撃の危険性の大小によって自づと決つたが、当時においては、相ついで起る戦争や襲撃に備えることが最も重要なことであつた。そのためには、必然に大規模な共同放牧でなければならぬことになる。だが、このことだけを考へていたのでは、牧草の密生してない蒙古高原であるから、家畜群を養うことができなくなる憂いがある。また、仮に牧草の比較的密生している地域で、大規模な共同放牧が可能であつても、家畜群が大きければ大きいほど、大量の牧草の必要から、牧草を求めより屢々牧草地を變る必要がおこる。そこで、多少外部から襲撃される危険性があつても、小規模な共同放牧を試みることも考えられる。しかし、それにしても、当時は襲撃や戦争が相ついでみられたのであるから、当時の共同放牧の規模は、とかく大きくなりがちであつたものと考えるべきであらう。

このように、彼等が共同放牧の形態をとつたことは、彼等の社会に共同体が存在していたことを示すものでなければならぬ。そして、共同放牧の形態が次第に大規模化する傾向にあるたということは、その共同体が次第に大規模なものになつてい

ったことを推測せしめる。

では、当時の彼等の社会にみられた共同体は、どのようなものであったであろうか。

これを簡単にのべることはむづかしく、また、それでは誤解を招くおそれもある。だが、それが、少くとも十一・二世紀ごろにみられた氏族共同体とは異質のものになっていったことを指摘することはゆるされよう。当時においても、まだ、血縁関係を維持しようとする傾向は残っていたが、相つづ襲撃や戦争によって氏族の分離や結合が相ついでにおこり、たとえば、*Ögözi* 氏にみられたるが如く、一部はタイチュウト部と一緒に、他の一部はチンギス汗と一緒にするなど、氏族の血縁関係は次第に破壊されていった。そして、あらたに結成された共同体の中には、それまでにはみられなかった封建的なものの「芽生え」をみることができるといふ。ことに、領主に対する多くの義務のあった点などをみるに、封建的な色彩濃きものを感じずにはおかない。だが、その領主といつても、共同体の意志に反する如何なることも認められず、また、配下の者といつても、身分が永久に固定してしまふというようなことはなかった。その点、やや個人主義的経済関係による共同体の臭がするかも知れない。しかし、遊牧社会における特殊性や、過渡期にみられる特殊性を考えると、当時の共同体は、やはり封建的な共同体への移行期に該当するようには思えるのである。従つて、当時の共同体は、『封

建の共同体』と名づけられてよいのではなからうかと思われる。

(1) 屈慶基「成吉思汗」五頁。

(2) The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world; 1253-55 (ibid); p. 100.

(3) 屈慶基「前掲書」一七頁。

(4) ウラデミルツォフ「蒙古社会制度史」前掲書、一一一頁。

(5) 「蒙古の秘史」小林高四郎訳註、卷三以下。

(6) ウラデミルツォフ「チンギス・ハン伝」小林高四郎訳、四一頁。

(7) ウラデミルツォフ「蒙古社会制度史」前掲書、一五九頁。

(8) 「彼等の中には一層安楽な生活を得んがために、共同体から分岐しようとする者もあつた」(ウラデミルツォフ「蒙古社会制度史」前掲書、一九一頁。)とあるのは、個人主義的な関係によって成つていた共同体の臭のするところといえよう。

## 五

元朝の成立期ころの蒙古民族が『封建的共同体』において、共同遊牧を行つていたことについては、さきにのべた通りであるが、そのことから、ただちに、彼等の生産物一切が共同生産物であつたと解釈するのは適當でない。当時においては、家畜や家畜以外の天幕・幌車・単純な武器など一切のものが私有物であつた。従つて、彼等の生産物も一応彼等各人の私有物であ

ったはずである。そのことは、つまり、当時、私有制が普及していたことをもがたるものでなければならぬ。

ところが、私有制が普及すると、貧富の差が生ずる。たとえば、富者の中には、何人もの妻を得んがため、多くの家畜をそれぞれ妻の両親におくる者もあらわれ、中には、百人もの妻を得る者もいたというから、非常に多くの余分の家畜をもっていた富者がいたことがわかる。これに対して、『蒙古の秘史』に記されているが如く、僅か五頭の山羊だけしかもっていない貧者もあらわれ、中には、食う物がなくて狼の食い残した物を拾って食う者もいたというから、非常にみじめな貧者もいたことがわかる。

しかし、それらの貧者は勿論のこと、富者といえども、皆、自己の立場に満足してはいなかった。富者は富者なりにますます富者になり、勢力を得て、ますます自己の地位を高めようとした。また、貧者は、一日も早く生活の楽になるように努めた。

だが、このようなそれぞれ自己の地位を高めようとすることは、かえって貧富の差を大にならしむるものがあつた。何故ならば、勢ある富者は、当時の相つく掠奪や戦争によって多大の戦利を得たり、西域の商人たちからいろいろな物を得たり、また、自分の配下の者たちからいろいろな搾取をすることなどによって、ますます裕福になる。ますます裕福になり勢力を得れば、ますます配下の者もふえる。そうすれば、ますます戦

勝・取得・搾取は容易になる。という具合に、雪だるま的に裕福になり勢力を得ることができた。これに対して、貧困な無力のものは、余り生活も楽にはなれなかった。何故ならば、狼の食い残した物を拾って食っているような貧者や、羊や山羊を僅か数頭もっているだけの貧者たちでは、他のものと共同放牧するための諸条件をそなえたものとはいえない。従って、共同放牧することは不可能である。ところが、共同放牧することの不可能な者は、生業をもたない者に等しい。生業をもたない者が容易に浮ばれることは、まづない。また、たとえどうにか共同放牧できる家畜をもったものでも、領主たちに納めなければならぬ税が重く、納税の義務は絶対的なものであつた。西欧からきた旅行者たちの目には、その状態が、あたかも彼等の財産も身体も思いのままに処理せられていたようにみえたほどである。それは、非常に苛酷な重税が課せられたからであらう。従って、彼等が裕福になることは容易なことではなかったと思われる。だから、ますます裕福になっていた富者たちと、配下の貧者たちとの所謂貧富の差は、ますます増大していったのである。

ところが、重税の義務を負わされた彼等がそれで満足していたかという点、そうではない。彼等の中には、領主たちのように、良き牧草地をもち、多くの配下を従え、多くの家畜をともなった大規模な *khutug* を形成する長老の身分となり、豪勢

をきわめたいと思う者もあらわれた。もちろん、一足飛びにそこに到達することは望めない。しかしながら、当時の相つぐ戦争などに従軍して軍功をたて、多くの分配をうけることによって、次第にそこに到達することができないこともなかった。

だから、それを志すものもすくなくなかった。従って、財産や戦利品の分配については、誰もが関心をよせた。また、ときには、財産や戦利品の分配問題について、彼等の間に不満があらわれ、彼等同志の中でたがい<sup>あひ</sup>に争う事態もみられた。

こうみえてくると、当時、相つぐ襲撃や戦争などによって、共同放牧の規模はますます大きくなり、その領主たちの勢力はますます大きくなったが、貧富の差の増大を招き、配下におかれた者たちの不満があらわれた。この不満は、当時の蒙古社会における内部的な矛盾のあらわれでなければならぬ。

- (1) 「蒙古の秘史」小林高四郎訳註、各所にあらわれている。
- (2) ドーソン「蒙古史」前掲書、六一頁。
- (3) 「蒙古の秘史」前掲書、一一七頁。
- (4) 「蒙古の秘史」前掲書、八頁。
- (5) 拙稿、「蒙古民族の商業について」経済論叢、第七九巻、第二号参照。
- (6) これらの彼等は、生産手段をもっていないものに等しい。

たとえば、馬がなければ、牧草の密生していない広大な蒙古高原を度々移動しなければならぬ彼等にとって、それは、あたかも足の不自由なものが行っているようなものである。

ある。従って、一緒に共同放牧することはできないといえよう。

- (7) ウラヂミルツォフ「蒙古社会制度史」前掲書、二六四頁。
- (8) 前掲書、二六五頁。
- (9) 前掲書、一六九頁。